

## 平成十五年度 センター試験 漢文「解説」

## 【書き下し文】

客有り、柴窯の片磁を携へ、数百金を求めて云ふ、「甑に嵌むれば、陣に臨んで以て火器を避くべし。然れども確たるや否やを知る由無し」と。余曰はく、「何ぞ縄もて此の物を懸け、銃を以て鉛丸を発して之を撃たざる。如し果たして火を避くれば、必ず砕けず、価数百金なるも多しと為さず。如し砕くれば、則ち火を避くるの説確たらず、理として価数百金を索むる能はざるなり」と。鬻ぐ者肯ぜずして曰はく、「公、賞鑑に於いて当行に非ず、殊に殺風景なり」と。急ぎ之を懐にして去る。後貴家に鬻ぎ、竟に百金を得たりと聞く。

夫れ、君子は欺くに其の方を以てすべきも、罔ふるに其の道に非ざるを以てし難し。砲火の横衝すること、雷霆の下撃するがごときに、豈に区区たる片瓦の能く禦ぐ所ならんや。且つ雨過天青は、釉色の精妙なるものに過ぎざるのみ。究に人造に由り、神功に出づるに非ず。何ぞ断裂の余、尚ほ靈なること是くのごときもの有らんや。余旧瓦硯の歌を作りて云ふ有り、

銅雀台の址頽れて遺す無し

何ぞ乃ち剩瓦の多きこと斯くのごとくならん

文士例奇を好むの癖有り

心に其の妄なるを知るも姑く自ら欺かん

柴片も亦此の類なるのみ。

## 【通釈】

あるよそ者が、有名な柴窯の磁器の破片を持ってきて、数百金の代金を要求して言うことには、「兜にはめれば、戦場で銃弾が当たるのを免れることができます。確かかどうかはわからないけど。」そこで私が「どうして縄でこの破片を吊り下げて、銃で撃ってみないのか。もし本当に銃弾を免れるのなら、きつと砕けないだろう、数百金を払っても高くはない。もし砕ければ、銃弾を免れるという説は確かめられない、道理として数百金の代金を要求することはできない」と言うと、商売人はそれを認めずに「あなたは磁器の鑑定についての専門家でもないくせに、本当に興ざめなお方ですな」と言って、急いでその破片を懐にしまうと去っていった。後で、身分の高い人の家に売り込んで、百金をせしめたと聞いた。

いったい、君子というものは、理にかなった方法でなら欺くことはできるが、道理にかなわない方法で欺くことは難しいのである。雷が落ちるような音を立てて砲火が飛び交う戦場で、どうして小さな磁器の破片が銃弾を防ぐことなどできるだろうか。それに、柴窯の磁器の雨上がりの青空のような色合いは、釉薬の絶妙であるものにすぎないのだ。所詮、人間が作ったものであり、神のしわざによるものではない。どうして壊れた残りの破片に、そのようなすぐれた力があるだろうか。私は、古い瓦でできた硯の歌を作った。魏の曹操が築いた銅雀台の跡は廃墟になって、何も遺っていないのに、どうして銅雀台の瓦で作った硯が、こんなにたくさんあるだろうか。文士はだいたい変わったものを好む癖があるので、でたらめだとわかっていながら、しばし自分の心をごまかして楽しんでいるのだ。

柴窯の磁器の破片もこの類のものなのだ。

## 【設問解説】

レベルは「やや難」。話の内容自体は、さほど難しいものではないが、設問になった部分はかなり難しく、悩んだかもしれない。しかし、センター漢文のセオリーどおり、文章全体の構成と意味を考えながら解けば、そこそこの得点はできたはずである。枝問が増えて一問あたりの配点が下がったのは、受験生にとっては、ありがたい。

問1 すでに定番化した二字熟語を選ぶ問題。ただ、今年は例年に比べて意味の違いがあまりはつきりしない選択肢だったので、若干難しかった。

(ア)「出」には、「出る、出す」の他に、「逃げる、逃れる」「(脱出、出奔)」「生まれる、生じる」「(出生、出藍)」などの意がある。「神功に出づ」は「神の力によって生じる」というような意味なので、「出藍」が正解。ちなみに「出師」は(すいし)と読み、「軍隊を出すこと」、覚えておきたい。

(イ)「余」には、「豊か、多い」「(余裕、余分)」「残り」「(残余、余韻)」「ひま」「(余暇)」「その他の」(余人、余念)などの意がある。ここで「断裂の余」と言っているのは「磁器の破片」のことであると気づくかどうか、ポイント。「壊れた磁器の残り」なので、「余熱」が正解。

問2 どちらも、漢文の量がある程度こなしてないと、難しかったかもしれない。

Aは、まず「確否」が「確たるや否や」と見当をつけることが第一歩。そこがわかれば、「知」の目的語は「確否」しかないし、「無」は「由」を否定しているの、「確たるや否やを知る由無し」と決まる。

Dは、「罔」に「あざむく」という(注)がついているので、「難罔」は「欺きがない」という意味であると見当がつく。ただ、そこで慌てて「罔ひ難き」と読んではいけない。直前の「欺くに其の方を以てすべき」と対句表現であることに気づくかどうかポイント。よって、「罔ふるに其の道に非ざるを以てし難し」が正解。これは授業でも繰り返して来たことだから、できたと思いたい。

問3 これは比較的やさしかった。文章全体の意味がおおよそつかめていれば、素直に読んだとおりに解釈すれば、③が選べると思う。

問4 これも、そこまでの文章が読めていれば、自然に選べるだろう。筆者の言葉に従えば、当然磁器の破片は砕け散るであろうとは容易に想像がつく。

問5 基本的には「押韻」の問題。それが解ければ、解釈もおおのずと絞れる。(i)漢文の授業を受けた者にとっては、美味しすぎる「押韻」の問題。詩は「七言絶句」なので、「遺(イ)・斯(シ)」に韻を踏んでいる。条件を満たすものは「欺(ギ)」しかない。

(ii)「欺」だから、①か③の二択。一・二句で、「そんなに瓦があるわけがない」と言い、「心に其の妄なるを知るも」と言っているのだから、①が正解である。

問6 授業でも繰り返し注意したように、センター試験では文章全体の構成を考えることが重要。前半の段落は、法外な値段で磁器の破片を売りつけようとする詐欺師まがいの商人に騙されなかったという、いわば筆者の自慢話。「どこぞの馬鹿は買ったということだ」という嫌みなオマケまでついている。こちらが具体例とすれば、主題は当然後半の段落に来るはず。そう思っただけで、後半最初が「夫れ君子は」と大げさな物言いで始まっているので、この文が主題であることは一目瞭然。一言で言えば「君子たる者、理にかなわぬ話には騙されんぞ」という話。「奇を好む」のは、文士のシャレ、遊び心のなせるわざなのである。というわけで、⑤がもつともふさわしいと知れよう。